

私の風土記

今村 雄二郎 (株式会社アイヴィス 名誉顧問)

第四章

日商岩井時代

製造業か商社かと迷ったが、これからの日本には、技術導入や貿易による経済発展の必要性を強く感じ、若干の縁故のある当時の日商（現在の双日）に入社した。

原子力技術の導入の仕事を希望して、東京本社の原子力部に採用される予定になったのだが、入社してみると航空機部の部長が現れ、ぜひ航空機販売の仕事をやってほしいとの要請があり、ここで航空機部所属に変わることになった。

仕事は民間航空と防衛関係に分かれていて、私は防衛関係の担当になった。民間航空部門では、ボーイング社の代理店として旅客機（当時は 707 型）の販売に腐心していたが、日本の都市を破壊し原爆を投下した B29 のメーカーとしてきわめて印象が悪く、代理店締結後、昭和 40 年（1965 年）まで 10 年の間 1 機も売れなかった。

日商の防衛部門では、航空自衛隊の次期主力戦闘機用として、米ノースロップ社の N156 戦闘機を売り込もうとしていた。伊藤忠はグラマン社、丸紅はロッキード社を担いで、結局ロッキード社の F-104 が選定された。

我々は航空機部に所属していたのだが、なかなか空を飛ぶ本体が売れずに、地上支援機材や試験設備の仕事で露命をつないでいた。その中の一つのプロジェクトとして、航空技術研究所（現 JAXA）が風洞を建設する事になった際、ボーイング社の技術を導入することになり、この建設を川崎重工が請け負ったが、日商が風洞の計算/制御用に米バロース社の汎用コンピュータの導入契約をした。

これが、恐らく日本における汎用エンジニアリングコンピュータの輸入としては、最も初期ではなかったかといわれている。

昭和 30 年代の後半になると、航空自衛隊に F-104J 戦闘機が三菱重工のライセンス生産によって納入され、毎年機数も増加していった。この戦闘機はノーズが細く、翼も小さく非常に恰好が良いのだが、ノーズに収まるレーダアンテナの径が小さく、索敵レンジは短い。またエンジンが単発という点で、エンジントラブルで一度フレームアウト（停止）すると生存機投率が低い。これらの欠陥が、我々が次の世代の戦闘機を選定して、販売する大きなヒントになった。

(次頁に続く)

昭和 38 年（1963 年）頃、在日米軍（厚木駐留の艦載機）と航空自衛隊との合同索敵演習というのがあり、F-104J（約 24 機）と米空母から厚木基地経由で参加したマクドネル F4B によって実施された。両国の戦闘機が競争して、不明目標機を索敵するというものだが、結果はわずか 3 機の米海軍 F4B が全ての不明目標機をエンゲージし、F104J はまったく出る幕がなかったという。

マクドネルという航空機メーカーは、日本では知名度がなかったのだが、我が社は直ちに代理店契約を締結して、F4 戦闘機を航空自衛隊の次期戦闘機として売り込みを始めた。

この機体は大きなノーズに強力なレーダを搭載しているとともに、双発で翼面加重も比較的小さく、片発停止しても安全に帰投できるというものだった。

結果、昭和 41 年（1966 年）頃防衛庁に採用された。この年、私は日商のロサンゼルス事務所に移任になった。

日本では主力兵器は丸ごと輸入せずに必ずライセンス生産になる。そのために機体の代理店であっても、搭載機器／部品は全て個々のメーカー同士の取引となる。そこで私の次の仕事は、先ず主要搭載機器及び部品メーカーの代理店を押さえることであった。ウエスティングハウス社（レーダ）、レーセオン社（空対空ミサイル、スパロウ）、リットン社（慣性航法装置）、その他約 10 社ほどの部品メーカーの代理店を取得して、更に各々に相対する日本のメーカー各社に製造技術ライセンス提携させるため、日本の本社を支援した。

昭和 44 年（1969 年）末に私は東京本社に戻ったが、この時までには日商は岩井商店を合併して、日商岩井になっていた。本社では航空機部官需第二課長として、搭載電子機器分野を担当した。

三菱電機／レーダ、東芝－日本航空電子／慣性航法装置、日立／電波高度計、NEC－島津製作所／ヘッドアップディスプレイ、三菱プレジジョン／戦闘機シミュレータ等の製造技術ライセンス提携を結び、必要な部品の輸入をおこなった。

翌昭和 45 年（1970 年）には大阪万博が開催され、日本の復興も眼に見えて活発化してきた。昭和 46 年、私は官需第一課長を兼任して、機体の担当も兼ねた。小牧の三菱重工、航空機製作所には、既に 20 家族以上のマクドネル社の技術者が常駐して（当時マクドネル村といっていた）F4EJ 戦闘機の生産を指導していた。

東京からでは十分な支援は出来ないで、日商岩井は名古屋支社の担当を増員したし、そこにはマクドネル社の F4EJ 日本プログラムディレクターのアーニー・ザイザーが常駐して指揮をとっていた。一方私が引き継ぐまでに、F4E 戦闘機の偵察機型、RF4E、16 機の輸入契約が行われていた。輸入価格は 1 機 17 億円ぐらいで、戦闘機型より複雑なのに戦闘機のライセンス生産引渡し価格（当時 50 億円弱）の 1/3 位であった。